

Title	教科書で『平家物語』はどう読まれてきたか：「忠度都落」を例に
Sub Title	The tale of Heike in textbooks: with a special reference to the "Tadanori miyako-ochi" section
Author	安野, 博之(Yasuno, Hiroyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.95, (2008. 12) ,p.290- 301
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩松研吉郎教授高宮利行教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00950001-0290

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

教科書で『平家物語』はどう読まれてきたか

——「忠度都落」を例に——

安野 博之

はじめに

現在、我々が最初に『平家物語』に接するのは、ほとんど例外なく学校教育においてであろう。『平家物語』のごく一部分が教材として採用され、その一部分を通じて学習者は『平家物語』全体をおぼろげながら認識する。国語（古典）の授業の中で、何を教材とするか、そしてどの部分を採用するのかは、その時代の要請により、取捨選択が繰り返されてきた。何が選ばれ、何が切り捨てられたのかを考察することは、その時代における『平家物語』享受の様相を示しているといってもよいだろう。

本稿では、中等教育において『平家物語』が明治期以降、教材としてどのように扱われてきたのかを概観した上で、現在高等学校の古典において定番教材となっている「忠度都落」が、いつ頃から登場し、どのように教えられているのかを考察したい。

一 『平家物語』の時代的変遷

明治五年（一八七二）の学制公布直後の数年間、旧制中学校の言語教育のカリキュラムは、江戸期の藩校とほとんど変わらなかった。カリキュラムは「国語学」「習字」「古言学」に分かれ、それらはしばしば藩校にいた漢学者によって教えられた。彼らは『文章軌範』や『左伝』などの伝統的な漢文テキストと、『日本外史』のような漢文で書かれた江戸末期の国学テキストを教材として一緒に用いた。

明治十三年（一八八〇）には、国語学と古言学は、「和漢文」となる。当時は依然として漢文が最高の地位を占めていたが、書き方を習うという実用的な目的のために、仮名に基礎を置くテキストが漢文テキストに並ぶものとして認識されるようになる。具体的には、『土佐日記』『源平盛衰記』『平家物語』『徒然草』や江戸期の学者・歌人による「雅文」などもカリキュラムに取り入れられた。

明治十九年（一八八六）の中学校令により、中学校のカリキュラムは文部省の直轄となり、文部省の検定を受けた教科書しか使えなくなる。それに伴い、言語教育のカリキュラムも「国語乃至漢文」となる。明治二三年（一八九〇）には教育勅語が發布され、同年芳賀矢一と立花銑三郎により、各時代より主要な仮名テキストを掲載した選文集である『国文学読本』が刊行される。本書は現在の日本古典文学史の基盤となる多くの和文テキストを収めており、後の中学校教科書に多大な影響を与えた。その収録内容は、江戸期国学がほとんど古代・平安のテキストだけに限定されていたのは異なり、『源平盛衰記』『太平記』などの中世の軍記物や、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの説話集、『方丈記』『徒然草』などの随筆を採り入れている。当時の国語教科書は、国語を書くための規範となる文章を選定しており、中世・

近世の文章、特に漢文の表記を和文の文法と組み合わせた和漢混淆文こそ、それにふさわしいと考えていた。

だが、二葉亭四迷や山田美妙らによる言文一致運動が徐々に明治の文語文を廃れさせ、ついに明治四一年（一九〇八）以降に至って言文一致体が教科書に採り入れられるようになる。文語文が実用的機能を失ったことにより、国語教科書は規範的なテキストにより書き方を習うという目的から、そこに書かれる倫理的、イデオロギー的なものを理解するためのものと変化した。そのため、『平家物語』『太平記』等の軍記物は、多少の濃淡はあれ、敗戦まで主として自己犠牲や忠義といったものを教えるためのものとなる。⁴ただ、明治期より戦前（昭和初期）までの教科書掲載内容を具体的に見てみると、『平家物語』では「忠度都落」「故郷の花」「敦盛最期」等の、抒情的な側面を持つ場面も一貫して見ることが出来る。これは、明治三八年（一九〇五）の日露戦争後に出版された藤岡作太郎の『国文学全史 平安朝篇』⁵を契機として徐々に広まっていった日本固有の文化を探索しようとする動きの中で、平安期が女性的、伝統的、日本固有の時代として、高く評価されるようになっていったことと無関係ではあるまい。⁶『平家物語』については、昭和四年に山田孝雄の校訂によって岩波文庫版『平家物語』が刊行される。本書は覚一本を以後の『平家物語』基礎テキストとした点で画期的なものであり、その序説において、山田は以下のように述べている。⁷

この物語をよみて平家一門の人々の多くが文弱にして武事に疎かりしとは想像するを得ず。然るに世人常に説をなして平家の滅亡は文弱に溺れて武備を怠りしが為なりとせり。本書、全篇いずこにかさる痕跡を認むべき。平家の敗れし原因は一にして足らずといへども一はその榮華を極めし反動として世人の同情を失へると、一はその改新の急激にして保守思想の激しき反発を誘起せしめしを主とし、内には衆心個々にして統一を失へるによるものなり。

之を描きてその文弱を罵るが如きは、畢竟読むべき書を読まず、研究すべき事を研究せざるが為なり。真摯に本書をよみては平家の公達の意氣と胆力とは同情せざるべからざるなり。かの教経の如き、知盛の如きその勇実に關東軍の中に比すべきものあらざりしなり。宗盛の如きも、その態度の堂々たるものは三種神器奉還を拒絶せしにて知らるべし。殊にかの忠度がさばかりの歌人にてしかも、片腕を切られながら敵なる岡部忠澄をその片手にて丈余も投げ退けたりしはこれ抑も文弱に流れたる貴公子の為し得むわざならむや。

覚一本は、叙事詩的な世界を抒情でくるみこむ形をとっており、とりわけ「忠度都落」は、覚一本の一つの典型をなしていることからすれば、覚一本の定着が、『平家物語』の抒情的側面を浮き立たせ、忠度を武士の世でありながらも和歌を愛した風流人とする見方を広めていたのであろう。平家の武人に貴族的側面を見いだすことは、すなわち平安期を指向することに他ならない。『平家物語』は、抒情的側面を強調することにより、平安文学に寄り添う形でその存在感を示す、という一面もあつたのである。

戦後まもなく、日本が占領軍の指揮下に置かれると、文部省は、戦後教育の目的は平和国家の建設であると宣言し、戦闘行為や国家主義的イデオロギーを扱った箇所を教科書から全て排除するように指令した。とりわけ軍記物の中で不動の地位を築いていた『太平記』は、教科書からほとんど姿を消した。『平家物語』では、「俱利伽羅峠」「鴨越」「弓流し」など、勇猛な武士の行為を描写した箇所は教科書から削除された。ただ、『平家物語』は軍記物の中で依然として生き残る。それは、このテクストが無常というテーマに中心を置く、悲劇ないし喪失の物語という側面が強調されたことに起因する。多様な要素からなり、安易な分類を拒む『平家物語』だからこそ、その時代の要請に応えるような形で、現在まで

読み継がれてきているのである。これは、学校教育において、古典テキストがその一部分しか提示されないことと分ちがたく結びついている。

二 教材としての「忠度都落」

次に、『平家物語』の具体的な享受の様相をうかがうための一例として、「忠度都落」が、教科書の中でどのように扱われてきたのかに焦点を絞って考察してみたい。教材としての『平家物語』については、既に堀内武雄氏、松原洋子氏の論考があり、昭和五〇年までの中学・高等学校教科書において、『平家物語』のどの場面が教材として取り上げられてきたのがわかる。両氏の論考によれば、「忠度都落」は、戦前戦後を通してよく採択されるものであり、とりわけ戦後においてその採用数が急増し、時代が経つにつれて中学校教科書から高等学校教科書へとその採択が移行してきていることが理解できる。戦前においては、抒情的な側面を持つ典型的な場面として親しまれ、明治三九年（一九〇六）刊の『尋常小学唱歌』では「敦盛と忠度」（後に「青葉の笛」と改題）という題名で、「敦盛最期」と並び「忠度都落」「忠度最期」が唱歌に取り入れられた。明治後期の小学生にとって、軍談や平家琵琶、物語唱歌は、歴史教育入門の意味を持っていた。先に挙げた山田孝雄の序説にあるように、忠度を含む平家一門を「文弱」とする考えは依然としてあるにせよ、中学校教材としての「忠度都落」は、教師、学習者双方にとって親しみやすいものであつたらう。「忠度都落」は美しい師弟愛の物語として読むこともできたであろうし、日露戦争以後の戦没者と重ね合わせて、鎮魂の物語として語られることもあつたと思われる。要するに、その時代の要請により、「忠度都落」は、いかようにも教えることができる便利な教材であつたのである。

敗戦後においても、『平家物語』は無常というテーマに中心を置く、悲劇ないし喪失の物語として読み継がれる。「祇園精舎」が教材として急浮上し、現在ではこの部分が『平家物語』中、「木曾の最期」に次いで多く採択される箇所となっている。¹⁵ その中で「忠度都落」は依然として教科書の中にとどまり続けている。それは避けることのできない死を引き受けさせられた者とそれを見送る者との、最終的な交流を描いたもの¹⁶として、敗戦直後の時代状況にふさわしい教材として引き継がれ、現在でも『平家物語』は無常の文学という価値観を植え付ける教材となっているからである。¹⁷

「忠度都落」が戦後も教科書に採録され続けたのにはもう一つ理由がある。それは、戦後の古典カリキュラムが平安期の文法を基盤とし、扱う教材も『竹取物語』『伊勢物語』『枕草子』『源氏物語』などの平安文学が中核に据えられるようになったことと関連する。戦後において、平安期は天皇を中心とした我が国独自の貴族文学が花開いた時期と認識するのではなく、敗戦による価値観の一大転換期の中で、武士の時代が到来する以前の平和な時代として認識するようになった。¹⁸ 戦後の国語教科書は、先述した日露戦争以後の動向と同様、平安期及び平安文学を志向してはいるものの、その内実には大きな相違があったのである。

「忠度都落」は『平家物語』の中にあつて、戦乱を直接に扱わず、歌道執心¹⁹ないしは風流に心を寄せる人物の物語であり、そこに描かれる忠度の貴族的な行為は、平安期の平和的なテクストに準ずるものとして扱うことが可能であり、『平家物語』を代表する名場面として、教科書の中で生き延びたのであつた。採録数から言えば「木曾の最期」に水をあけられてはいるものの、適度な長さであることもあり、実際に教材として使われる割合は高いのではないだろうか。

以上述べてきたことは、「忠度都落」の内容面からの考察であるが、ここで外部からの視点、すなわち戦後における新制高等学校国語教科書の置かれた状況という観点から「忠度都落」を考察する。言うまでもなく、学習指導要領と教

科内容は密接な関係があり、昭和三三年度の学習指導要領改訂により、現代文と古典とに科目が分かれば、教科書が分冊になったことで、採択教材数が増加した。これにより、教師は多くの教材から指導する教材を選ぶことができるようになった。その後昭和四五年度の改訂において、古典の必修単位減少に伴い、採択教材が大きく減少した結果、作品が精選され、固定化した。その一方、教師自身の多忙化が加速し、十分に教材研究をする時間が取れなくなると、新しい古典教材を収録した教科書は敬遠され、定番教材を漏らさず掲載した教科書が求められる。教科書会社も、自社の教科書を採用してもらうためには、あまり新奇な古典教材を掲載するわけにはいかなくなる。他社との熾烈な競争に加え、少子化の影響などもあり、最大四三社あった高等学校国語教科書発行者（教科書会社）は、撤退や統合を経て現在では一二社まで減少する。また、平成一〇年度の改訂により、教材が更に精選され、高等学校で古典を学ばずに卒業することも可能になった。大学受験においては、古典を入試科目として課さない大学の増加に伴い、上位校を除けば、高等学校における古典指導の重要性も著しく低下した。これらの外部的要因もあり、『平家物語』において「忠度都落」は「祇園精舎」「木曾の最期」と並ぶ、無常観を教える定番教材として、現在ますます定番化、固定化してきているのである。

三 「忠度都落」をどう読むか

戦後の『平家物語』研究をリードしてきた研究者の一人である松尾葦江氏は、「平家物語ほど、研究の最前線の成果が、教育現場や一般読者の利益に供されていない、どころか、足枷にすらなっているような古典はないのではないか」と述べている。^①松尾氏はその原因を、研究者が、誰にでも分かる、誰をもひきつける平家物語論を書いていないこととする。一方、教育現場からの実践報告に目を向ければ、『平家物語』を語り物文芸としてとらえ、朗読・群読（複数の読み手

による朗読²¹を通してそのリズムや文体の楽しさを教える教材とみなすものが少なくない²²。松原洋子氏も、戦前の「体制を擁護し、体制の思想をあまねく広めるための」古典教育への反省をこめて、ありのままの古典の姿（古典の持つ本質）を伝えるための手段として、朗読・暗唱を重視している²³。これらは、音読、朗読、暗唱を通じて古典の調子を味わうという学習指導要領に基づいた指導方法である。

元アナウンサーの堀越むつ子氏は、中学時代、国語の授業中に指名されて「忠度都落」を朗読すると、聞いていた先生が涙を流したという。堀越氏は、読むことで人に感動してもらえることに気付き、これを契機としてアナウンサーの道に進もうと考えるようになったと述べている²⁴。これは声の力を示す端的な例だが、確かに朗読には、そこに込められた心理や美を体感することができるといふ考えが教育現場には根強い。「平家物語」は朗読に適したテキストの一つとみなすことができよう。松尾氏も覚一本を「語りの効果を、読みによっても再現できるように仕組まれた本文」とし、「語りの文学」を読むには最もふさわしいテキストとする²⁵。とりわけ「忠度都落」は、忠度自身が漢詩の一節を朗詠するのであるから、「平家物語」中、これほど朗読にふさわしい場面はない。

しかし、近年朗読・群読に対して違和感や危険性を指摘されるようになってきている点も見逃せない。須藤敬氏は、中世の語りの様相を考慮せずに群読を行うことに対して違和感を抱き、大津雄一氏は群読で得られるという「原初的で根元的な感動」の内実を吟味することなく、「言霊信仰」でもいふべきプリミティヴィズム、あるいはロマンティシズムのもとに、生徒たちに朗読を強いることに違和感を抱き、出会うべき本質が「国民精神」や「武士道」や「日本国民の優秀さ」などというものに、いつ置き換えられるかもしれない、と危惧している²⁶。これらの懸念は、語り物文芸としての『平家物語』が、教育現場においてことさらに強調されてきたことによるのであろう。

「忠度都落」に関しては、現在まで数多くの研究論文が存在するが、これらの成果が教科書では全くといっていいほど取り上げられていない。その最たるものが、覚一本以外の諸本との本文比較の成果である。「忠度都落」は本文の異同が多く、語り本系と読み本系との比較を通して、覚一本の位置づけを理解することができる部分といえる。延慶本、四部合戦状本の注釈書も刊行され始めた現在、「忠度都落」を諸本と比較しながら読むことにより、『平家物語』が流動体としてのエネルギーを、四百年にわたって保ち続けた壮大な文学であることが理解できよう。『平家物語』には異本が多いという紋切り型の説明に終始するのではなく、その様相を具体的に示すことで、『平家物語』の理解は深まるであらう。

おわりに

軍記物語の中で、『平家物語』はその多様性により受け止め方はさまざまに変化しながらも、戦前戦後を通じて現在まで教科書に採録され続けてきた。とりわけ「忠度都落」は、どの時代においても柔軟に読み替え可能な教材であり、内部的、外部的要因により現在ますます定番化してきている。教科書は、時間的制約により古典テキストの一部分しか提示できないため、そこに登場する人物を通してテキストを読み解くことには当然ながら限界がある。教える側が、テキスト全体に目を通しておくことは勿論のこと、教材という形で提示されるテキストの一部分を通して、学習者がそのテキストの全体像に関心を向けるようにしていかなくてはならない。研究者の側でも、最新の研究成果を一般向けにわかりやすく提示する努力が求められる。このことは、文学研究がその存在意義を厳しく問われている現在、自らの研究基盤を維持していくためにも喫緊の課題であらう。

- (1) 以下、この章の記述は教科書研究センター編『旧制中等学校教科内容の変遷』ぎょうせい 昭59・3及び鈴木登美「ジャンル・ジェンダー・文学史記述―『女流日記文学』の構築を中心に」、デイヴィッド・バイアロック「国民的叙事詩の発見―近代の古典としての『平家物語』」、ハルオ・シラネ「カリキュラムの歴史の変遷と競合するカノン」(ハルオ・シラネ・鈴木登美編『創造された古典―カノン形成・国民国家・日本文学―』新曜社 平11・4)に拠るところが多い。
- (2) 『芳賀矢一選集』第二巻 国文学史編 國學院大學 昭58・9所収。
- (3) 明治期の中学校教科書において、『源平盛衰記』は『平家物語』よりも多く採用されていたが、テクストの整理と校訂が進められるに従い、大正期以降激減し、戦後は姿を消している。その様相については田坂文穂『旧制中等学校国語科教科書内容索引』教科書研究センター 昭59・2、及び阿武和泉『教科書掲載作品13000』日外アソシエーツ 平20・4を参照されたい。ただし、後者は古典テクストのどの部分が教材として採用されているかについての記載がなく、調査として不十分といわざるを得ない。
- (4) 『太平記』に関しては、中村格「教材としての太平記(その一)―天皇制教育への形象化―」(『日本文学』第三二号 昭57・1)を参照されたい。
- (5) 秋山虔校注『国文学全史 平安朝篇1、2』(『東洋文庫』平凡社 昭46・11、昭49・2所収。講談社学術文庫にも所収。
- (6) 註(1) 鈴木氏前掲論文第2章「二十世紀初頭における平安文学の位置」
- (7) 山田孝雄『平家物語』上巻 岩波書店 昭4・3 三四頁。引用に際し、一部表記を改めた。
- (8) 山下宏明「平家物語の抒情的側面をめぐって」(『軍記物語と語り物文芸』塙書房 昭47・9)
- (9) 註(1) デイヴィッド・バイアロック氏前掲論文第2章「『平家物語』を読む―美学から倫理へ―」
- (10) とはいえ、完全に排除されたわけではなかったことは、註(3) 阿武氏前掲書八〇八頁で確認できる。
- (11) 堀内武雄「教材としての平家物語」(『国文学 解釈と教材の研究』第三卷第一〇号 昭33・9、松原洋子「教材としての平家物語」(『中世文学論叢』第四号 昭56・7) だが、松原氏はこの論考において自ら述べているように、旧制中学校の教科書を十分調査していないため、訂正すべき点もある。一例をあげると、松原氏は「祇園精舎」を「戦前には全くなかったものが戦後になって出現したもの」とされるが、実際は大正一五年八月に刊行された高等女学校教科書『新

- 編女子国文」(修文館)がその嚆矢である。なお、本稿では深く立ち入る余裕はないが、教科書数が増えれば当然特定の教材の出現数も増えるので、採用教材の推移を考察する際は、全体数からの割合も考慮に入れなければならないし、各教科書の市場占有率についても配慮が必要である。さらに、教科書に採用されていたとしても、本文の長さの関係で実際の授業では使われないものも多いという点も忘れてはならない。
- (12) 第四学年上巻所収。「更くる夜半に門を敲き わが師に託せし言の葉あわれ 今わの際まで持ちし箴に 残れるは「花や今宵」の歌」が忠度のことを歌う歌詞である。
- (13) 小川和佑『唱歌・賛美歌・軍歌の始源』アーツアンドクラフツ 平17・10 一五九―一六一頁
- (14) 忠度の行為を否定的にとらえる見方は、早くも江戸期に刊行された『平家物語評判秘伝抄』にあり、そこで忠度は「愚将」として酷評されている。その点については小松茂人『平家物語』享受の歴史』(『中世軍記物の研究』桜楓社 昭37・1)を参照されたい。
- (15) 松原氏が調査を行った昭和五〇年までの時点では、「祇園精舎」「木曾の最期」「忠度都落」の順であった。教材としての「木曾の最期」については、田中貴子『検定絶対不合格教科書古文』朝日出版社 平19・3に詳細な検討がなされている。思うに、現在の国語教科書に、戦前にはよく見られた忠度の最期を描いた「故郷の花」が見当たらないのは、「木曾の最期」や「能登殿の最期」にその役割を取って代わられたためであろう。
- (16) 中村文『平家物語』と和歌―平家都落の諸段をめぐって―(山下宏明編『平家物語 受容と変容』あなたが読む平家物語4 有精堂 平5・10)
- (17) 田中氏は注(15)前掲書一九頁において、教科書の指導書は依然として『平家物語』を無常観の文学とする、石母田正以外の旧説を出していないと批判している。ただ、大津雄一氏は石母田の論を、新しさを装った古い明治のロマン主義の言葉であったとする(戦時下の『平家物語』(『国語と国文学』第八五卷第十一号 平20・11)。
- (18) 註(1)ハルオ・シラネ氏前掲論文第5章「戦後のカリキュラム―カノンの非軍事化」
- (19) 砂川博「覚一本平家物語の文芸性―忠度都落を読む―」(『平家物語新考』東京美術 昭57・12)
- (20) 註(16)中村氏前掲論文
- (21) 松尾葦江『平家物語』研究のゆくて(『平家物語がわかる。』朝日新聞社 平9・11)

- (22) 渡辺春美「中学校における『平家物語』の学習指導」(『戦後における中学校古典学習指導の研究』) 溪水社 平19・3) ことの中で渡辺氏は「忠度都落」をグループによる放送劇とする実践例を紹介している。
- (23) 註(11) 松原氏前掲論文
- (24) 日本経済新聞 平17・9・26夕刊。これは昭和三〇年代後半のことと思われる。
- (25) 註(21) 松尾氏前掲論文
- (26) 須藤敬「学校現場で―次世代の平家物語」(『国文学 解釈と教材の研究』) 第四七巻第二二号 平14・10)
- (27) 大津雄一「何のために―『平家物語』群読の危うさ」(大津雄一・金井景子編『声の力と国語教育』) 学文社 平19・3)
- (28) 註8 山下、註16 中村、註19 砂川氏前掲論文の他に、伊藤富雄「平家物語忠度都落の条から―ただ一身の歎と存候―」(『国文学 解釈と教材の研究』) 第九巻第一五号 昭39・12)、信田周「平家物語における和歌的情緒について―巻七「忠度都落」をめぐって―」(東京教育大学中世文学談話会「峯村文人先生退官記念論集 和歌と中世文学」) 昭52・3)、川田正美「『平家物語』における芸術談―忠度・経正・教盛らを中心に―」(『日本文学誌要』) 第三七号 昭52・7)、長谷川隆「『平家物語』における平忠度像」(『高松工業高等学校研究紀要』) 第一八号 昭57・3)、谷山茂「千載和歌集の成立とその時代的背景」(『谷山茂著作集 三』) 角川書店 昭57・12)、小野美典「平家物語「忠度都落」考―四部本・延慶本・覚一本の表裏から―」(『山口国文』) 第一〇号 昭63・3)、佐々木巧一「『平家物語』の抒情的展開―その二「忠度都落」の章―」(『野洲国文学』) 第五一号 平5・3)、服部桂子「平忠度論―文の人・武の人の造形―」(『日本文化研究』) 第七号 平7・3)、深澤邦弘「教材研究 忠度都落「情もすぐれてふかう」―『平家物語』巻第七―」(『武蔵野女子大学文学部紀要』) 第三号 平14・3) 等がある。
- (29) 延慶本については延慶本注釈の会「延慶本平家物語全注釈」が汲古書院より、四部合戦状本は早川厚一・佐伯真一・生形貴重「四部合戦状本平家物語全釈」が順次刊行されている。なお、管見の限りでは「忠度都落」の内容が諸本によって大きく異なる点を一般向けに指摘したものとして千明守「平家物語が面白いほどわかる本」中経出版 平16・10 二二―二一八頁がある。
- (30) この点に関しては、鈴木健一「知ってる古文の知らない魅力」講談社 平18・5 三四頁に言及がある。本書もその書名から推測するに、註(15) 田中氏前掲書と同様、文学研究と教育現場との乖離を埋めるべく書かれたものと思われる。